どこ生まれのマンモスゾウ！？

樽（たる） 創（はじめ）（学芸員）

写真に写っているものが何だかわかりますか？ そう、マンモスゾウの臼歯（レプリカ）です（KPM-NNV 546：図 1）。私が 1993 年の 4 月に神奈川県立博物館に採用されたとき「あ、マンモスゾウの臼歯だ。実物だ。」と思いました。ところが、当時の古生物担当学芸員の松島さん（現・生命の星・地球博物館名誉館員の松島義章博士）が「いや、それはレプリカだよ。」と答えてくれたのです。「えっ、レプリカ！？」私はよーく見たのですが、どうしてもレプリカには見えませんでした。そのくらい造りがよかったレプリカ標本です。この標本は 1973 年に購入し、「北海道夕張市産、京大地鉱標本、京都科学製作、150,000 円」とレプリカ製作当時の記録が残っています。

マンモスゾウというと、日本では北海道、島根県沖からの産出が知られています。そして北海道夕張市もその1つに加えられていたのですが、最近聞かなくなりました。日本で初めて記載された“日本産”のマンモスゾウは、この臼歯の標本で 1938 年に京都大学の槙山次郎博士によって記載が行われました（Makiyama, 1938）。臼歯は左上顎第3臼歯でした。しかしその記載には、この標本は購入された標本であること、が書かれていました。つまり、日本産かどうかが判らないのです。

日本に生息したマンモスゾウならば、もしかするとレプリカを造った当時に何か言われていたかもしれない。そこで（株）京都科学に問い合わせて聞いてみたところ、「すでに何世代も前に造られたのもので、担当者などがわからない。」とのことでした。

では図鑑を見ると、「日本化石図譜増訂版（昭和 39（1964）年 5 月 30 日初版発行～昭和 50（1975）年 7 月 25 日増訂 4 版発行）鹿間時夫著」や「原色化石図鑑（昭和 41（1966）年 9 月 1 日初版発行～平成4（1992）年 9 月 30 日 16 刷発行）益富壽之助／浜田隆士著」などでは、夕張市産のマンモスゾウとして掲載されています。しかし「日本の長鼻類化石（1991 年 2 月 25 日初版発行）亀井節夫編著」では、すでに「現地産のものかどうかは明らかではない。」とされています。

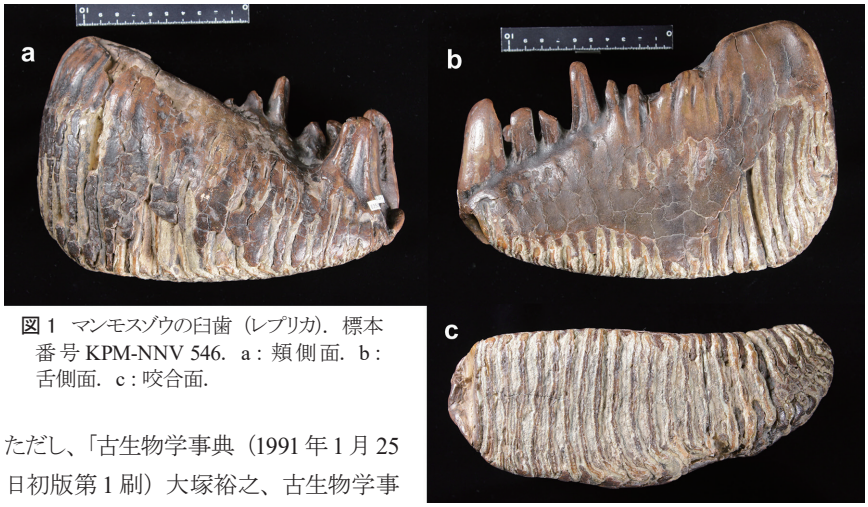

図 1 マンモスゾウの臼歯（レプリカ）．標本番号 KPM-NNV 546．a：頬側面．b：舌側面．c：咬合面．

ただし、「古生物学事典（1991 年 1 月 25 日初版第 1 刷）大塚裕之、古生物学事典第 2 版(2010 年 6 月 10 日第 2 版第1刷）高橋啓一」では、「夕張産のマンモスゾウ臼歯の化石（ 京都大学所蔵)」と写真付きで掲載されています。論文では高橋ほか（2013）を見ると「産地に関する疑問が残ったままとなっている.」とされています。これらをまとめてみると、どうやら日本産ではないらしいのです。

また、先に記した「日本産の標本かは不明」では、鹿間（1943）では「混入ではないか」とか、亀井（1987）では「産出地点も層準も不明のまま」といった議論をしているのです。

実は、この標本は「現在日本（夕張）産のマンモスゾウとされる、されない」の中途半端な状態にあります。このレプリカを作る際、亀井節夫博士が「これは日本産ではないかもしれないよ」と言ったらしいと松島さんが言っていました。2016 年になり、レプリカが造られて 43 年以上も前のことですが、また記載されてから 78 年もたっていますが、これがこの標本についてわかっていることです。

私は 2014 年の夏、京都大学で開催された哺乳類学会に参加した際、初めて夕張産のマンモスゾウの標本を目にしました（図 2）。その時に見たものは確かに実物なのですが、実物を見てもなお生命の星・地球博物館にあるレプリカはレプリカではなくて実物に見えるぐらい、そのくらい造りの良いものでした。

写真撮影を行うにあたって、京都大学理学部地質学鉱物学教室助教松岡廣繁博士にお世話になりました。記してお礼申し上げます。

亀井節夫 , 1987. 松井愈教授記念論文集 , 1-12.
Makiyama, Jiro, 1938. Memoires of the College Science, Kyoto Imperial University, [B]14, 1-59.
鹿間時夫 , 1943. 国立中央博物館論叢 6, 9-85.
高橋啓一・添田雄二・出穂雅実・小田寛貴・大石徹 , 2013. 化石研究会会誌 , 45, 44-54.

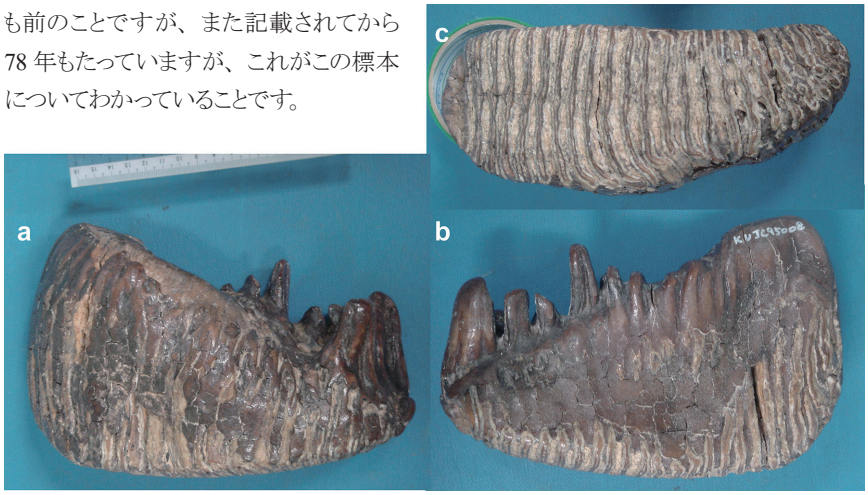

図 2 マンモスゾウの臼歯．京都大学の標本番号 KUJC 95008 がついている．a:咬合面．b:頬側面．c：舌側面．